

2026 6/23

No.2261

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



カーリング日本選手権が横浜BUNTAI（横浜市中区）で異例の夏開催となり、相模原市出身でミラノ・コルティナ冬季五輪代表のフォルティウスの小谷優奈選手（左）らが活躍した。



contents

視点点描	3
百歳を生きること	
講演録	4
いま、中国で何が起きているのか？ ～習近平体制の現状と課題 神田外語大学教授 興梠 一郎氏	
経済双眼鏡	8
技術革新が生んだ「テック保守」	
野村義樹×リアルワールド	9
サッカー・ワールドカップで 中国が優勝する方法	
管理職はつらいよ！	10
逆風こそ飛躍のとき	
言葉をことばで考える	11
附属か付属か	
くらし2026	12
広がる介護保険外サービス 課題は質と利用料	
神奈川景気データファイル	14

事務局だより

◇2026年7月定例講演会
7月9日(木)午後1時30分～3時
ロイヤルホールヨコハマ
(横浜市中区)
講師：BNPパリバ証券経済調査
本部長 河野 龍太郎氏
演題：世界経済の死角、日本経
済の死角

◇2026年8月定例講演会
8月20日(木)午後1時30分～
3時
メルヴェーユ(桜木町駅近く)
講師：国際園芸博覧会協会
事務次長 小池 政則氏

【お知らせ】 神奈川政経懇話会では、会報「政経かながわ」に会員企業の新商品の紹介、地域貢献活動、人事などジャンルを問わずさまざまな会員情報を掲載しています。掲載の問い合わせなどは事務局☎045(226) 2121。

視点 点描



百歳を生きる日々

「人生百年時代」といわれる。仮に百歳生きたとして、会社を定年退職してから40年もある。筆者は定年まで同じ企業に勤めることが当たり前のバブル世代。定年後の転職、あるいは新しい分野での学び直し、いわゆるリスクリングを視野に入れ、「第二の人生」をデザインする必要がある。そうは

言っても、約40年間同じ会社に勤め、人生の3分の2を過ごした会社生活から、「次」にシフトするのは容易ではない。そんな迷いの中で、百歳の生涯をまっとうした神奈川ゆかりの日本画家・堀文子さんの展覧会を鑑賞した。「命の画家」といわれる堀さん。題材は動物、鳥、植物など

多岐にわたる。推敲を重ねた構図に描かれるのは、花の一瞬の輝きや、小さな生命のたくましさだ。どの作品からも、堀さんが命と向き合う「決意」のようなものを感じる。

そして驚くのは80歳を超えて、幻の花といわれるブルーポピーを探し求めてヒマラヤへ赴いたことだ。高地のため酸素マスクをして岩場を上り下りし、ようやく出合ったという。ブルーポピーは、冬は氷に閉ざされる標高5千以上の岩場を好む。「この花の毅然とした生き方、よりかからず、媚びず、たった一人で己を律する姿勢に、私は共感した」と「堀文子画文集 1999〜2009」につづっている。

その渾身の作品は、出身校である女子美術大学の「女子美アートミュージアム」（相模原市南区）で開催中の「堀文子の出発点〜女子美からはじまる写生帖・下図・

本画」（8月4日まで）で鑑賞することができる。

堀さんは1918（大正7）年生まれ。同大前身の女子美術専門学校を卒業後、太平洋戦争が始まった。同展では軍需工場で働く女性を描いた「落下傘を造る少女」の絵はがき、航空乗員を描いたスケッチも展示され、激動の百年を生きた一人の画家としての足跡もうかがい知ることができる。

同展を通じて感じるのは、題材への探究心と対象物の観察力、そして作品を完成させる集中力だ。晩年の作品まで、それらは途切れることがない。「百歳を生きる」とはどういうことなのか。堀さんから学んだ展覧会であった。同展はミュージアムホームページで案内する。 <https://www.joshiibi.net/museum>（神奈川新聞社地域共創本部県央・相模原統括 秋山 理砂）